

データベース構築にむけた資料情報の整理：基幹研究：アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築

著者	飯田 卓
雑誌名	民博通信
巻	161
ページ	10-11
発行年	2018-06-29
URL	http://doi.org/10.15021/00009101

基幹研究 ● アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築 (2017-2020年度)

民博におけるフォーラム型情報ミュージアム(Info-Forum Museum、以下IFMと略す)の研究カテゴリーは、2014年度に始まり、今後ますます多くの成果が公開される時期にさしかかっている。その局面にあって、先行するプロジェクトの進捗状況にあるていど踏まえながら、われわれはアフリカ研究に関するIFMプロジェクトを申請した。その研究手順は、他のIFMプロジェクトと若干異なっていたが、2017年4月に発足して2018年度も継続される。1年をふり返ってみると、うまくいった面もあれば予想外の問題に気づかされた面もある。ここで中間的な総括をして、残りの3年間を展望するとともに、われわれの経験を他のIFMプロジェクトのメンバーやこれからIFMに関わろうとする研究者と共有したい。

IFMの目的と制約

まず、IFMの性格を確認しておきたい。民博ウェブサイトによると、その目的は、①特定の文化資源に関する国際共同研究の実施とその成果のコンテンツ化・多言語化、②フォーラム型情報ミュージアムのシステム構築とその運用、の2つにある(国立民族学博物館 n.d.a)。わたしの理解では、IFM提案者の多くはこれまで①の作業を優先しており、あるていどの研究資料(①でいう文化資源)が集まったところで、②の問題にとり組んできた。しかしわれわれのプロジェクトでは、計画立案の段階で②を進めやすいよう配慮し、実施にあたって②を先取りして進めるほうがよいと考えた。

このように考えた理由は、②で述べられているシステムの構築や運営をプロジェクトのメンバーだけで担うのがひじょうに難しいからである。ここでいうシステムとは、具体的には、標本資料をはじめとする研究資料のデータベースのことだ。つまり、集めた研究資料をデータベースに仕立てあげる最終の段階では、資料が作られたり使われたりするさいのコンテキストをよく知った者(以下、民族誌家と呼ぶ)がいくら多くてもだめで、情報学を専門とする研究部員や情報課職員、さらにはIT企業のシステム技術者たち(以下、まとめて技術者と略す)の力を借りなければならない。彼らとの話し合いに時間をかけることを念頭に置かなくては、いくら共同研究が成功しても、あるいは研究資料の社会的価値が高くても、プロジェクトはじゅうぶん成功しないだろうと思ったのである。

じっさい、システム技術関係のいわば異分野の人たちとの話し合いは、慣れなければ時間がかかるし、トラブルも起こりやすい。わたしは、アフリカ資料IFMプロジェクトに先行して、日本民族学協会が管理していた資料に関するIFMプロジェクトを2年間実施し(飯田 2016)、そこでも技術者と話しあってきたが、彼らの前提と民族誌家の前提が違うことに驚かされた。たとえば民族誌家は、技術者が知りたがっているのは完成したシステムの見栄えや操作性であり、そのアイデアを伝えさえすれば当面の作業が進むと思いがちだ。しかし実際には、あるていど整理が終わった表計算ソフト(エクセル)のファイルを渡さなけれ

ば、技術者も作業にかかれなかった。また、表計算ファイルの不備はそのつど修正すればよいとわれわれは思っていたが、修正がたび重なると遺漏が生じやすく手間もかかるので、技術者に歓迎されなかった。それは考えてみると当然で、技術者がおこなうのは、データベースのたんなるデザインではない。彼らは、表計算ファイルに入力されたデータを手作業でサーバーに「登録」しており、かなりの時間や労力を費やしている。ファイルを受けとった後でこちらから口頭の指示をひき受ける余裕はないのだ。

日本民族学協会のプロジェクトのときには、早期にデータベースを完成してもらうつもりでいたが、民族誌家側の事前準備に予想以上の時間がかかった。また、民族誌家側でやるべき作業を技術者側が無理してひき受けてくれた結果、完成したデータベースは民族誌家が要求する操作性をすべては備えていなかったため、作りなおしにも時間がかかった。

技術者がプロジェクトの要望に真摯に対応してくれていることはよくわかるが、いやわかるからこそ、システム構築については研究の早い時期からメンバー全員で考えておかななくてはならないといえよう。

アフリカ研究データベースの内容

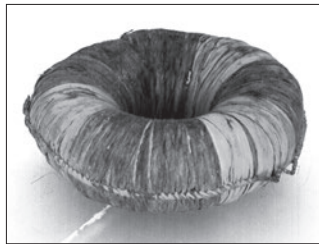
本プロジェクトの目的は、民博が所蔵するサハラ以南アフリカ地域の資料に関して「英語、フランス語、スワヒリ語、ポルトガル語などアフリカ諸国の公用語に対応した資料データベースを構築する」ことである。標本資料だけを対象とした点は、現行の多くのIFMプロジェクトと共通しているが、アフリカのように時間をかけて日本から移動しなければならない場所ではとくに、あらたな研究資料を集めているとそれだけで時間を費やしてしまう。川瀬慈(国立民族学博物館)のように映像資料や音声資料に造詣の深いメンバーもいたので、他の資料もプロジェクトに含めようと一時は考えたが、データベースで公開する研究資料は標本資料に限定することにした。

そして、プロジェクト期間4年のうち1年をかけて、海外の研究者の閲覧に耐えられる英語データベースを作ることにした。このように書くとぜいたくに時間を使っているようだが、作業はけっして悠長なものではなかった。館内データベースを参照したり収蔵庫で原資料を見たりするのは、館にいるときにしかできないからだ。また、対象となる資料は、西アジア展示場が担当する北アフリカ地域のものを除いても21,000点近くにのぼる。これらの資料すべてについて、自然な英語に翻訳できるような資料名を見なおし、類似のものは同じ検索語でヒットするようにすることを、初年度の目標とした。

とくに後者が難物だった。たとえばアフリカでは、女性が朝の水汲みを終えて水甕を頭上に載せて運ぶとき、植物繊維や布で作ったやわらかいクッションを頭と甕の間に挟むことがある。館内でのみ閲覧できる標本資料目録データベースを使って検索してみると、写真に示したように、このクッション状のものは



民博所蔵資料「頭上運搬用 壺敷」(標本資料番号H0113877、南スーダン)



民博所蔵資料「頭上運搬用 容器敷」(標本資料番号H0114262、南スーダン)



民博所蔵資料「頭上運搬用 台座」(標本資料番号H0000960、ウガンダおよびケニア)



民博所蔵資料「頭当て」または「頭上運搬用 輪」(標本資料番号K0006954、ガーナ)



民博所蔵資料「マット」または「コーヒーポット置き台」(標本資料番号H0007159、エチオピア)



民博所蔵資料「鍋敷き」(標本資料番号H0147314、エチオピア)



水瓶を置く台として使われている平たい石(2011年、マダガスカル中央高地、飯田卓撮影)。

「頭上運搬用 壺敷」「頭上運搬用 容器敷」「頭上運搬用 台座」「頭当て」「マット」などとばらばらの名称で登録されていることがわかった。これらをすべて含みこむ名称はいかなるものか、というのが問題である。この問題を解決しなければ、英語の名称も決められない。

5つのうち3つに共通する「頭上運搬用」に着目するのは、近道のようながかえって迂遠である。なぜなら「マット」という名称の資料は、丸底の甕を床に置くときに使われることを示しているかみしれず、「頭上運搬」という使用場面が前景に出るのはミスリーディングだからである。資料名の選択では用途と形状をバランスよく考慮しなければならないが、ここでいう用途は「硬くて不安定な物体を安定させる」といった「機能」に限るべきであり(山中 2017)、頭上運搬が床への安置かという「使用場面」まで「用途」に含めて考えてはならない。最終的にわたしは、この資料に対して「緩衝台(敷物)」という日本語名と、「Cushion」という英語名を与えた。「機能」と、それに深く結びついた「形状」を資料名の根拠としたわけである。

これに対して、「壺敷」「鍋敷」に含まれる「壺」「鍋」などの使用対象(operand)や「頭上運搬」といった使用場面は、資料名から独立した「用途(対象或使用場面)」という別項目に記載するようにし、副的な検索語として使えるようにした。同様に、機能とは直接関係ないのに資料名に含まれる素材名(たとえば「鉄鍋」における「鉄」)も、「支持体・素材」という別項目に記した。さらに、「男性用」「女性用」「年長者用」といった使用者も、資料名とは別に検索できたほうがよいので資料名から外し、別項目として独立させた。いっぽう、われわれの作業以前に与えられていた資料名は、われわれの予想しないコンテキストが踏まえられた結果であるという可能性も考慮し、日本語のデータベースでは初期の資料名も別項目として残すことにした。

資料名についてはまだまだ書くべきことがあり、稿を改めたいと考える。とにかく、最初の1年間に約21,000の日本語資料名を見なおし、英語資料名も付与した。わたしだけでなく、館内メンバーも作業や打ちあわせの時間をとってくれたことは言うまでもない。だが、資料名はまだ暫定的なもので、今後、データベースの書きこみ機能を用いながら微修正していかなければ

ならない。また、資料名検討の過程で設けた項目と既存情報との統一や、日英以外の言語での表示など、今後もまだまだ作業は続く。

今後の課題

これまでのIFMプロジェクトのなかでは、初期段階でデータベースを完成させた例として野林厚志が代表となったプロジェクトがあり(国立民族学博物館 n.d.b)、われわれが計画を立てるうえでも参考にした。ただし、われわれが扱う資料の数は同プロジェクトよりも多いので、単純に比較するうえでは注意が必要かもしれない。

初年度にはデータベースの整理を優先させたため、冒頭で述べた①の国際共同研究を準備段階でとどめざるをえなかった。また、年度末におこなわれたプロジェクト評価では、他機関との連携やソースコミュニティとの連携をもっと積極的に構築したほうがよいと指摘された。こうした課題には、データベースの完成を機に、さっそく対応していきたい。対象となる資料の全貌を共有したうえで、種々の連携や研究活動に反映させ、相乗効果を高める予定である。

【参考文献・ウェブサイト】

- 飯田卓 2017 「民博の原点を伝える保谷民博コレクション」『民博通信』157: 10-11。
- 国立民族学博物館 n.d.a 「フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト」(<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project/ifm> 最終閲覧2018年3月12日)
- n.d.b 「台湾および周辺島嶼の物質文化」(<http://ifm.minpaku.ac.jp/taiwan/> 最終閲覧2018年3月12日)
- 山中由里子 2017 「物質文化を『翻訳』する—国立民族学博物館における展示解説の多言語化実践現場から」『国立民族学博物館研究報告』42(1): 49-70。

いいだたく

国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授。専門は生態人類学、文化遺産の人類学。著書に『身をもって知る技法』(臨川書店 2014年)や『海を生きる技術と知識の民族誌』(世界思想社 2008年)、おもな編著書に『文化遺産と生きる』(臨川書店 2017年)や『マダガスカルを知るための62章』(共編著 明石書店 2013年)などがある。